

餌高騰、酪農経営圧迫 生乳、値上げ交渉入り

大手乳業は慎重に検討

酪農家から生乳の販売を委託されている全国 10 の指定団体のうち、9 団体が販売価格の引き上げを求め、乳業メーカーと相次いで交渉に入ったことが 19 日、各団体への取材で分かった。残る北陸の団体も交渉に向け、準備を進めている。ロシアによるウクライナ侵攻や急激な円安で乳牛の餌となる配合飼料が高騰し、酪農経営が圧迫されたためだ。年度途中で値上げ交渉が全国に広がるのは異例だ。

東京や神奈川など 9 都県の酪農家から生乳販売を委託されている関東生乳販売農業協同組合連合会（東京）は 6 月、9 月出荷分から生乳 1 ㎏当たり現在の価格の約 10%に当たる 15 円の引き上げを求め交渉に入った。2019 年 4 月に生乳価格を引き上げて以降、据え置いてきた。乳業メーカーが要求に応じれば、13 年 10 月以来、約 9 年ぶりに生乳価格が年度途中に上がることになる。

同連合会は牛乳向けの生乳価格形成に影響力を持つ。年度初めの 4 月出荷分に間に合うよう交渉を済ませ年間を通して価格は変更しないのが通例だが、迫田孝代表理事常務は「この 3~4 カ月で想定を超えるペースで費用が増えている」と説明する。」

配合飼料の関係団体によると、今年 4 月の乳牛の配合飼料価格は 1 トン当たり 8 万 4 2 8 4 円で、前年同月より 1 3. 8%上昇。バターなど乳製品向けの生乳の大半を扱うホクレン農業協同組合連合会（札幌市）のほか、東北、東海、近畿、中国、四国、九州地方、沖縄県の指定団体も交渉入りした。

千葉県市原市で乳牛など約 70 頭を飼育する佐久間規幸さん（38）は「今年に入り赤字の月が増えた。このままだと経営が立ちゆかない」と嘆く。6 月は生乳の販売額に対し飼料費が 7 割以上を占め、約 5 割だった 19 年から負担は増大した。

一方、明治、森永乳業、雪印メグミルクの大手乳業 3 社は対応を慎重に検討する。牛乳の需要は新型コロナウイルス禍で外食など業務用が落ち込んだ後、回復が遅い。季節的に牛乳の消費が落ち込む年末年始は生乳が供給過剰になり廃棄される懸念がある。バターや脱脂粉乳の在庫も積み上がっているのが実情だ。

（7 月 20 日（水） 秋田魁新聞より一部抜粋）

大豆ミートおいしく 神代小児童 SDGs意識し調理



黄さん（中央）の指導を受けながら水ギョーザを作る児童

仙北市の神代小学校の 4 年生 19 人が 19 日、持続可能な開発目標（SDGs）を意識した調理に挑戦した。地球温暖化対策として注目されている大豆ミートを使った水ギョーザを作り、SDGs への理解を深めた。

水ギョーザ作りは、児童が自分たちにできる SDGs の取り組みを楽しく学ぼうと、環境教育の授業で実施した。

牛や羊のげっぷには強力な温室効果ガスのメタンが含まれ、地球温暖化の一因とされる。児童は植物由来の原料を使って肉のような味や食感を再現した「代替肉」の大豆ミートに注目。おいしい食べ方を知り、肉の大量消費を抑制して地球温暖化防止につながる狙いがある。

授業では市国際交流員で台湾出身の黄敏さん（25）が講師を務め、豚ひき肉を使った通常の水ギョーザと、大豆ミートの水ギョーザの作り方を指導。児童は作業でも▽洗い物を少なくする▽フードロスが出ないようにする▽ガスを無駄に使わない—など SDGs を意識し、ギョーザのたねを丁寧に皮に包んでゆで上げた。

2 種を食べ比べした佐藤重愛さんは「大豆ミートは肉のような食感でおいしかった。もう少し味付けを濃くすれば、もっとおいしく食べられたかなと思う。これからも大豆ミートを使った料理を食べていきたい」と話した。（大原進太郎）

（7 月 23 日（土） 秋田魁新聞より一部抜粋）